



特集

日本からアジアの子どもたちへ

旅する絵本のものがたり

『シャンティ』 通巻291号 2017年7月1日発行 (1・4・7・10月の1日発行) 1985年6月28日 第三種郵便物承認

巻末言

道



松永然道老師との思い出

シャンティ国際ボランティア会 元理事 恐山院代 南直哉

永平寺でまだ修行僧だった頃、当時上司だった松永老師に連れられてシャンティ(SVA)の事務所に行ったことがある。そこで、お互い30代だった秦さんと八木澤さんに初めて会った。

私が老師と話をしていると、それを見ていたふたりは、老師がその場を離れたとたん、妙におずおずと近づいてきた。

「あの、南さんは、いつもあんな風に会長(松永老師)にズケズケものを言うんですか?」

さほど大きくない目を見開いて秦さんが言った。

「そうそう、怖くないですか? 僕たちは怖くて怖くて……」

八木澤さんが驚きに堪えぬという表情で口を挟んだ。

永平寺で老師と私が会話する姿を見た人は、おそらく皆、同じように思っただろう。

「あの若僧の老師に対する生意気な態度は何だ!」

しかし、私は本当に寛容な人の怖ろしさを知っていた。他人に「任せる」と言って実際に任せることのできる人の厳しさを知っていたのだ。

永平寺で声を荒げることがまるで無かった老師は、人を蔑ろにする者と、他人を騙そうとする者を、決して赦さなかった。

「そういうことをするのはね、人を傷つけるのではなくて、壊すんだよ」

そう言っていた人はまた、不思議な人だった。

老師自身に特別優れた能力があったわけでもない(ごめんさい)。説教も器用ではないし、傑出したアイデアを捻り出したり、感心するような手腕を発揮するわけでもない。私は老師の文章が好き



故・松永然道老師(右)

だったが、上手く書くだけなら、私の方が上手い。英語だって、老師より流暢な人は周囲に大勢いただろう。

なのに、老師がいないと、いわば「戦にならない」のである。本多正信など、能力だけなら勝る家来がいたにしろ、家康無しで徳川家が成り立たなかったようなものだ。

「老師のいるところで働けるから、永平寺に来る気になったんだ」

そう言った役寮(役職を持つ僧侶)を私は知っている(現SVA副会長である)。

「度量」という言葉がある。「大器」という言葉もある。そんな言葉で、老師を語ることも無論できるだろう。

ただ、私はもっと違う何かを感じる。人が見ないところを見る智慧と、逆境にある人々への深い想像力。そして影のように纏う含羞。

多くの人々の縁の重さを感じ続けた人間の、草原に立つ大木のような姿こそ、おそらく道元禪師の言う「大人(だいにん)」なのだろう。

永平寺でいつだったか、いつも私を心配してくれた先輩が言った。

「直哉さんも、言うことなすこと、もう少し自粛すれば、良い坊さんになるんだけどな」

聞いていた老師がすぐに言った。

「直哉さんはいいんだよ。良い坊さんにならなくても。直哉さんになっていれば、それでいいんだ」

私は老師の冥福を祈らない。私の中に生きていてくれなくては困るからである。



今号の表紙
「なにをたべてきたの？」(佼成出版社)
ラオス・ヴィエンカム郡にて。
2015年撮影
©Yoshifumi Kawabata

世界には「絵本」を知らない子どもたちがたくさんいます。

絵本を知らないということは、文字を知らないということ。

文字を知らないということは……？

地雷原の看板の文字が読めないとな何が起きるか？

薬に書かれた注意書きが読めないためにどんな危険があるか？

読み書きができないことにより、失う命もありました。

「絵本を知り、文字を知る」

このことが未来を広げることにつながります。

この度の特集では、日本からアジアに旅立っていく

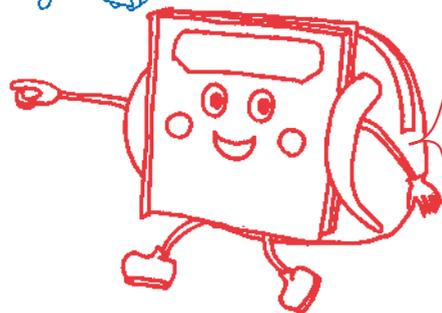
たくさんのお絵本たちのささやかなものがたりを綴ります。

Shanti vol.291 CONTENTS

4	特集 日本からアジアの子どもたちへ 旅する絵本のもものがたり
16	世界の絵本を読んでみよう 「ラオスの国」(ラオス1994年出版絵本)
18	わたしたちのお祭り ボートレース(ラオス)
19	世界の現場からAIRMAIL From活動の現場 ▶カンボジア事務所 ▶ラオス事務所
28	シャンティな人たち 花王ハートポケット倶楽部
30	SHANTI HISTORY 1999年 — 絵本を届ける運動のスタート —
31	お知らせ／編集後記
32	道「松永然道老師との思い出」 シャンティ国際ボランティア会 元理事 恐山院代 南直哉

日本からアジアの子どもたちへ

旅する絵本のものがたり



1999年より開始した絵本を届ける活動は、これまでに27万冊以上の絵本を旅立たせてきました。子どもたちの手に届くまでの僕らの旅を紹介します！

「絵本を届ける活動」とは？

紛争や貧困により、アジアには絵本を一度も読んだことのない子どもがたくさんいます。

読み書きができない、絵本を読んでもくれる人がいない子どもたちへ、絵本を手にする機会をもってもらおうと、1999年に「絵本を届ける運動」が始まりました。

「お菓子より絵本がいい、お菓子はすぐになくなるけど、絵本はなんでも楽しめるから」。

シヤンティが活動を始めたころ、カンボジア難民キャンプである少女が言ったことです。絵本は楽しいだけでなく、子どもたちが読み書きを習得することの助けにもなっています。地雷原の看板が読めずに地雷を踏む事故、薬の処方箋を読めないことによる薬の誤用など、読み書きができないことによる弊害はたくさんあります。このよ

うな国や地域では、識字は命をまもることにつながります。

日本で出版され、国や文化、時代を超えて親しまれている絵本に、各言語の翻訳シールを貼り付け、子どもたちが母語で読める絵本となったものを届けます。

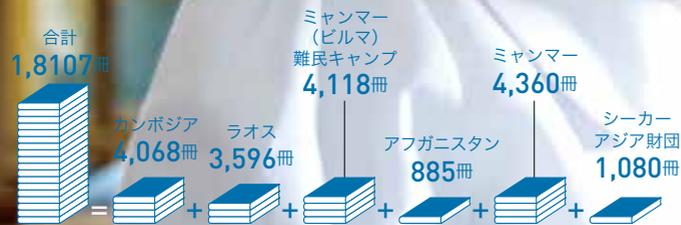
これまで多くの方のご協力により1999年から27万冊を超える絵本を送り出しました。この活動はアジアの文化・社会への共感と理解促進、国際ボランティア活動への参加の機会となっています。

活動開始当初は個人の参加者が多かったものの、その後、中学校が総合的な学習の時間に取り組むなど、日本の教育現場での広がりも見せています。また、企業の社会的責任（CSR）が問われるようになってからは、誰でも気軽に参加でき、社員一人ひとりが手を動かして作業のできる社会貢献として、企業にも認知されるようになりました。

これまでシヤンティが世界に届けた絵本の冊数 (1999年～2016年)



2016年度に届けた絵本の冊数





本を通して、文字を覚えることができます。
 先人の英知や歴史から学ぶことができます。
 世界への視野を広げることができます。

そして何より、人の喜びや悲しみを理解することができます。
 本の力によって生きる力を与えられた子どもたちは、自分たちの手で未来を切り拓いていくことができますよ。

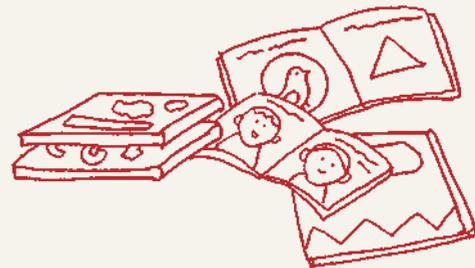
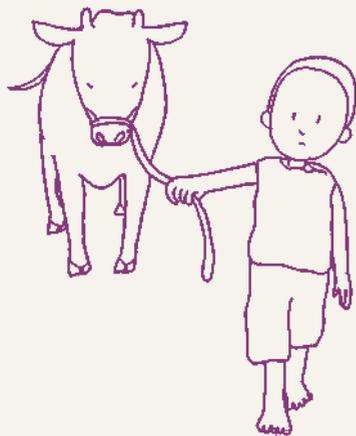
「本を開く」ことは「未来を拓く」ということ。



「本を知る」ということ。

本を知ると、本の中の人物と自分を重ね合わせて、一緒に苦難を乗り越えることができます。
 本を読むことを通して知った言葉を使って、自分の気持ちを表

現することもできます。
 人間の文化が「ことば」で伝えられていく限り、その「ことば」を伝える本は重要な役割を担っています。

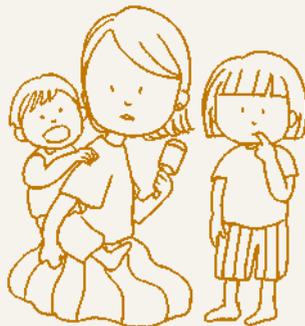


「本を知らない」ということ。

本を知らないということは、字を学ぶ機会がないということ。紛争、貧困などが原因で、学校に通えなかったり、本を手にする機会のない子どもたちがいます。
 学校や図書館などの施設が不足している国では、子どもたちが学ぶ機会を持ってないまま大人になってしまいます。

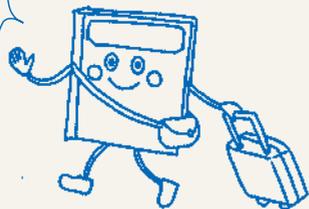
「本を知らない」アジアの子どもたち。

カンボジアの首都には700カ所のスラムがあり、学校に通えずゴミ拾いをするなどして生計を支える子どもがたくさんいます。
 ラオスでは、5人に1人が小学校を卒業できておらず、アフガニスタンでは、15歳以上の人の65%が読み書きができません。
 2011年には500の学校が治安の悪化により閉鎖されました。



わたしたちが知っておきたい
 本とアジアの子どもたちのこと。

絵本がどのように子どもたちに届くか見てみよう



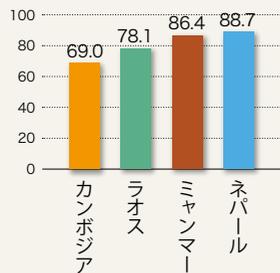
図書館の蔵書数



人口1人あたり蔵書数



初等教育就学率



出典元：公益社団法人 日本図書館協会

出典元：外務省

本に出会う
最初の入り口で
お手伝いできたら



シール貼り
ボランティア

池永美貴さん

絵本のタイトルと言語は「事務局におまかせ」にして、本が届くのを楽しみにしています。見慣れない言語と出会い、届いた絵本を手にするほっこり心が満たされます。仕事をしているので、現地へ赴くことは簡単にはできませんが、私の貼った絵本が現地へ届けられ、子どもたちに読まれていると思うと、現地と繋がっている気持ちになれます。この活動が継続できるよう、これからも参加し続けたいと思います。

たくさんの方が
ミャンマーの
子どもたちに届く
ことを願って



絵本の
翻訳

ワコー

ワーワトウンさん(ワコさん)
ミャンマー出身。
ビルマ語への翻訳を担当

ある日、知り合いの日本人が声を掛けてくれて翻訳ボランティアを始めました。自分ができることで人の役に立てればという思いで参加し始めました。ミャンマーに住んでいた頃、子ども向けの本がほとんど無く、本を読みたくて色々なところを訪ねていました。これからはたくさんの方の絵本が、子どもたちに届くことを願っています。

「絵本を届ける運動」を支える皆さん

「絵本を届ける運動」は、
参加する私たちがも
楽しい活動です

一人ひとりの
小さな力を集めて
より良い社会へ



団体として
参加・協力

公益財団法人伊藤忠記念財団
岩沢雄一郎さん
当財団は、伊藤忠商事株式会社国内7ヶ所で働く社員とともに年間530冊を作成しています。社員にとって社会貢献活動に関わる喜びを味わうとともに絵本の出会いを楽しむ機会となっています。一人ひとりの小さな力を集めてより良い社会を創っていること、すべての子どもに読書のよるこびを提供していくことは、当財団の理念と共通しています。これからのこの運動の「小さな力」として取り組んでまいります。



事務所
ボランティア

藤本美保子さん

2000年頃、住んでいる地域でクメール語の絵本を届ける活動に参加したのをきっかけにシャンティの「絵本を届ける運動」を知りました。以来、毎週事務所で見本をチェックするボランティアをしています。本を知らないアジアの子どもにとって、一冊の絵本が与える影響はとても大きいと思います。



絵本が日本から アジアの子どもたちに 届くまで



みんなの力で
絵本を届けています

「絵本を届ける運動」には、多くの人が関わっています。日本語の絵本を翻訳してくれる翻訳ボランティアの方、絵本に翻訳シールを貼ってくださる方、東京事務所の絵本ボランティアの皆さん、そして団体や組織として協力してくださる方々。多くの人の力が合わさることで、はじめて届ける絵本が完成します。

絵本セット

- ・絵本1冊
- ・翻訳シール
- ・説明書
- ・あいうえお表

1 申し込みを受け
シャンティから
絵本セットを発送



2 届いた絵本に
翻訳シールを
貼って返送

「はじめのおつかい」「くもりのちはれ せんたくかあちゃん」「ぐりとぐら」「そらいるのたね」(以上 福音館書店)
「まんげつによるまでまちなさい」(ペンギン社)
「アローハンと羊」(こくま社)

旅立っ 絵本が できるまで

旅立っ準備 OK!



4 チェック済みの絵本をダンボールに梱包して出荷準備完了



3 東京事務所ですり貼り間違いがないかチェックして修正

絵本が日本から
アジアの子どもたちに
届くまで



シャンティの
東京事務所から
絵本が旅立ちます

絵本が日本を旅立つ日

2017年2月2日、年に一度の絵本の運び出しの日。絵本を詰めた箱を、東京事務所の倉庫からトラックに積んで港に送ります。風の冷たいスッキリとした晴れの朝。恒例のラジオ体操のあと、さっそく作業に入りました。

まずは、倉庫からトラックまで列をつくって並び、パケツリレー方式で倉庫からダンボール運び出してトラックへ。絵本の入ったダンボールには、国別に色テープが貼ってあり、絵本のタイトル名・冊数・重量が書かれています。

1箱約20キロのダンボールには、皆さんに作っていただいた絵本が入っているため、「絶対に落とさないでください！」と

声を掛けながら丁寧に運び出します。ひとりが同じ位置で右から左へ運び続けていると、片方の腕や足だけに負担がかかってしまうので、適宜、向きを変え、人と位置を交代しながら作業します。

2016年分の絵本は前年より約2,000冊多く、箱数も258箱と約100箱多かったため、すべてを車に積み込むまで、1時間くらいかかりました。こうして、たくさんの方の力を借りて日本で旅支度を終えた絵本たちが、アジアの子どもたちのところへ旅立っていきます。



1 ラジオ体操で体をほぐします

絵本の旅立ちの日



2 リレー方式でダンボールをトラックへ積み込みます



3 国別にテープの色で仕分けして整理整頓



みんなの思いを
のせて
いってらっしゃい!



5 船や飛行機で各国の事務所へ届けます



海外の
シャンティ事務所に
絵本が到着!

日本を出発した絵本は
各地の事務所へ

日本を出発した絵本は、船便や航空便を通じてまず各地の事務所に着きます。事務所では中身を確認してから、子どもたちの待つ学校や図書館などへ運ばれます。



ミャンマー事務所



ラオス事務所



カンボジア事務所



アフガニスタン事務所



ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ



シーカー・アジア財団

絵本を子どもたちに届けるため
様々な方法で運びます。



車だけでなく、ミャンマーではバイクを使って届けています。ラオスのヴィエンカム郡では、車やバイクなどで届けることが難しく、ボートでしかたどり着けない村があります。念のためセーフティジャケットを着用して、ボートで絵本を運んでいます。

[絵本を使っている人の声]

難民キャンプに来たばかりの2006年当時、近所の人が本を読んでいるのを見て、図書館を紹介してもらいました。キャンプでは、まだ図書館のことを知らない親がたくさんいます。子どもたちは絵本を通して良い行いを学び、気持ちを育むことができます。私はお母さんたちにもっと絵本や図書館のことを伝えたいと思っています。

図書館に通う子どもたちから「お母さん」と呼ばれるんです



●PROFILE
テン・ティーさん。
家族5人でメラ難民キャンプに暮らしています。

図書館員

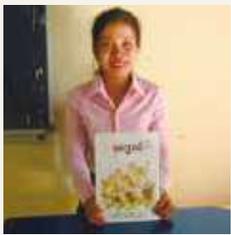
カレン語とビルマ語の翻訳シールを貼った絵本を、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ内に21館あるコミュニティ図書館と学校へ届けています。絵本は、子どもたちが図書館で自由に読むだけでなく、図書館員による読み聞かせや、図書館青年ボランティアが行う週末のおはなし会活動でも使われ、保育所や小学校で学習教材としても使われています。



読み聞かせ
ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ

幼稚園に絵本が届いてからは、多くの子どもが教室で絵本を読んでいます。わざわざ小学生の子どもたちも読みに来るほど人気です。子どもたちは家に帰ると、家族に絵本のお話をしていたことで、保護者も子どもが絵本を通して様々なことを学んでいると、嬉しそうに話してくれます。

子どもたちは家に帰って絵本の話をしているようです



●PROFILE
スレン・ヴィチェットさん。
46人の4歳児クラスを担当。
子どもが大好きです。

幼稚園の先生

幼児教育事業を通じて、幼稚園に絵本コーナーを造り、日本から届いた絵本を配架しています。絵本が効果的に活用されるよう、幼稚園の先生向けに、幼児の発達と絵本の関係、読み聞かせの方法、絵本の管理方法についての研修を行っています。特に絵本の読み聞かせは積極的に行うよう先生たちに呼びかけています。



絵本の配架
カンボジア

この村は豊かな自然に囲まれています。村の子どもたちは外の世界を知りませんが、絵本は子どもたち以外の世界について教えてくれます。子どもたちは動物が出てくる絵本、例えば「3びきのこぶた」などが人気です。遠い村まで何度も足を運んでくれてとても感謝しています。

子どもたちは絵本を通して世界を知ることができます



●PROFILE
ケンチャン先生。
ポートでしかたどり着かないハップーン小学校で3~5年生を担当しています。

小学校の先生

ラオスでは、教員たちの読書推進の知識や技術の定着を測るためのフォローアップとして移動図書館活動を実施しています。教員たちは研修を通じて、ラオスの教育政策と読書推進の関わり、絵本の管理方法、読み聞かせを学びます。最終的には教員たちだけで読書推進ができるように指導しています。



移動図書館
ラオス

絵本が日本から
アジアの子どもたちに
届くまで



子どもたちの手に絵本を届ける
シャンティの活動





ズーリカ (11歳)
アフガニスタン

▼お気に入りの絵本
「はらべこあむし」(偕成社)

▼メッセージ
将来は立派なエンジニアになりたいです。アフガニスタンの子どもたちに親切な協力と支援をしてください。日本のみなさんに感謝しています。



ハティーブ・ウル・ラーマン (10歳)
アフガニスタン

▼お気に入りの絵本
「ジोजオのかんむり」(福音館書店)

▼メッセージ
将来は立派な医者になりたいです。日本のみなさん、いつもぼくたちを支援してくれてありがとうございます。みなさんの支援は、絶対に忘れません。



マイソンワン (11歳)
ラオス

▼お気に入りの絵本
「なにをたべてきたの?」(佼成出版社)

▼メッセージ
おもしろい物語が読めるように助けてくれる心やさしい方たちに感謝しています。



マディーナ (12歳)
アフガニスタン

▼お気に入りの絵本
「スーホの白い馬」(福音館書店)

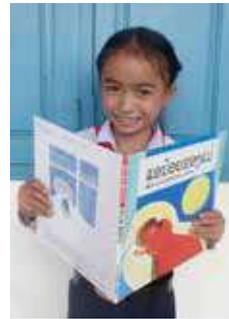
▼メッセージ
私の好きな科目は英語です。将来は医者になって、アフガニスタンの人々を助けたいです。



ファーカンダ (12歳)
アフガニスタン

▼お気に入りの絵本
「はじめてのおつかい」(福音館書店)

▼メッセージ
図書館には勉強しに来ています。将来は先生になってみんなの役に立ちたいです。



ター (10歳)
ラオス

▼お気に入りの絵本
「わたしのあかちゃん」(福音館書店)

▼メッセージ
一番好きな物語は、「わたしのあかちゃん」です。生活に関する知識を学ぶことができるし、昔の出来事は私たちにとって知識になるからです。



ソウワン (10歳)
ラオス

▼お気に入りの絵本
「わたしのあかちゃん」(福音館書店)

▼メッセージ
一番好きな本は「わたしのあかちゃん」です。知識を増やしてくれるからです。

ぼく、わたしのお気に入りの絵本を紹介します。

実際に絵本を手にした子どもたちに、お気に入りの絵本を教えてくださいました!



ネイン リー チョー (8歳)
ミャンマー

▼お気に入りの絵本
「おおきなかぶ」(福音館書店)

▼メッセージ
ほぼ毎日、図書館に通っています。将来は警察官になりたいです。



ソー・ウィン・ティン・キン (11歳)
ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ

▼お気に入りの絵本
「およく」(福音館書店)

▼メッセージ
ぼくも泳ぐのが好きなので、この本が好きです。



ナウ スー スー (10歳)
ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ

▼お気に入りの絵本
「おひさまいろのきもの」(福音館書店)

▼メッセージ
出てくる女の子がとてもまじめで、お母さんのお手伝いをよくするので、この本がお気に入りです。



ヴァ バン (16歳)
カンボジア

▼お気に入りの絵本
「ももたろう」(福音館書店)

▼メッセージ
日本の訪問者たちとお話をしたり、日本の絵本を読んだりするのが大好きです。



イ ティンザー モー (9歳)
ミャンマー

▼お気に入りの絵本
「なんでも食べるおばあさん」(タイの絵本)

▼メッセージ
月に3~4回ぐらい、図書館に来ています。将来は看護婦になりたいです。



ナウ オマ サン (14歳)
ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ

▼お気に入りの絵本
「どうぶつのおかあさん」(福音館書店)

▼メッセージ
将来は看護師になって、家族や同じ民族の人たちのお世話をしたいです。



チョウ・シトウ・ヘイン (7歳)
ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ

▼お気に入りの絵本
「ねずみのでんしゃ」(ひさかたチャイルド)

▼メッセージ
一番好きな本は「ねずみのでんしゃ」です。なぜかというと、平和な家族のお話だからです。ぼくたちにとって知識になるからです。



ソング ソテアラ (12歳)
カンボジア

▼お気に入りの絵本
「でんしゃでいこう でんしゃでかえろう」(ひさかたチャイルド)

▼メッセージ
絵本はルールを守ることの大切さ、嘘をついてはいけないことを教えてくれました。

ラオスの国

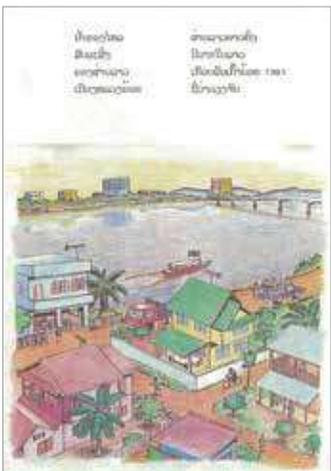
1

うれしいな国旗がのぼる。
とてもきれいなラオスの旗。
赤、青、白。
まんなかにも月が輝いている。
ラオスの国は豊かです。
三つの民族。心は一つ。



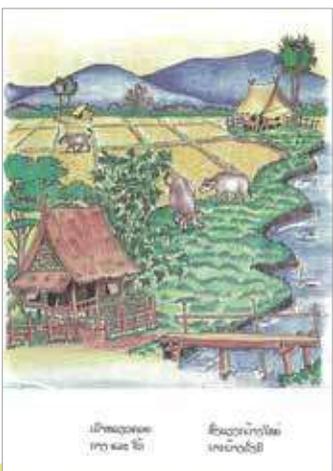
2

メコン川が流れています。
ラオスの国を横切っています。
ラオスは自然がいっぱい。
ラオスの首都は
ビエンチャンです。



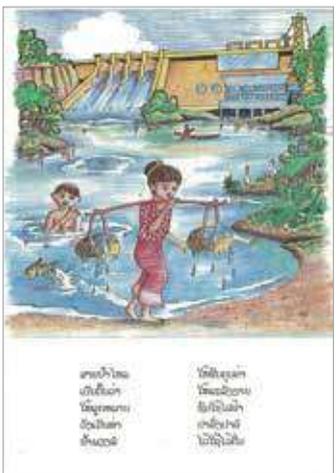
3

山の麓には畑が広がり、
中央部と南部は田んぼが広くて、
豊かな国です。



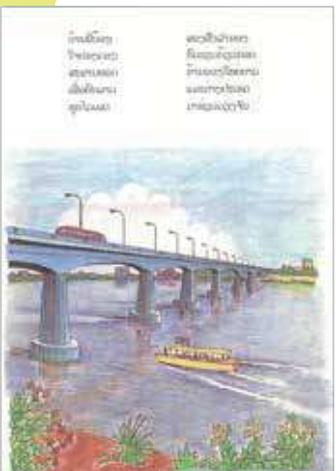
4

ラオスを流れている川は
とても大切。
ダムで電気をつくるから。
子どもたちは
その電気を使います。
安全な水が豊富にあるから、
たくさん働いて
お米をつくります。



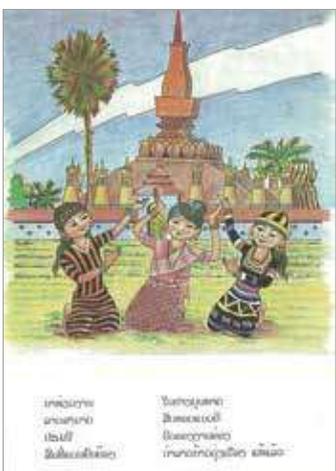
5

年齢や性別を問わず、
いろいろな国の人たちに
ビエンチャンを訪れてほしいから、
みんなで一緒に
橋をかけました。



6

みんなで祭りを楽しめます。
ラオスの文化は美しく、
ラオスの人びとはその文化を
よく引き継いでいます。
私たちの国は豊かな国です。



おしまい

世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
シャンティの様子や
スタッフを紹介します。

From Cambodia

カンボジア事務所

シャンティの中で最も歴史の古い
カンボジア事務所。行政職員の能
力向上等、質の高い支援や経済
格差の是正に貢献する活動が多
く行われています。



ルアンパバーン・カーン川でのボートレース



ボートレースの準備(ヴィエンカム郡)

仏教行事に合わせてラオス全国
で開催される、年に一度のお祭り、
ボートレース。実施の時期は地域
により様々ですが、ルアンパバーン
では、ブンホーカオバダッティン
(先祖の霊が現世に戻る仏事)に合
わせて毎年8月末〜9月初旬に行
われます。ボートレースは地元の人
にとって、新しい季節の到来を感
じさせるお祭りとなっています。ル
アンパバーンのボートレースはラ
オス全国でも最大規模で、各県か
ら見物客が集まり、首相も来賓と
して訪れるほど。村や職場ごとに
チームを作り、メコン川の支流・
カーン川で十数チームがトーナメ
ント制で速さを競い合います。
チームの団結と集中力が問わ
れる、活気に満ち溢れた
レースです。

ラオス
ボートレース

わたしたちの

お祭り



From Laos

ラオス事務所

学校建設を核とした施設改善
事業と教員の指導能力改善事
業。この2つを軸に、農村僻地
での教育開発に取り組むラオス
事務所の今をお届けします。

Hot Topics

① 幼児教育事業で本邦研修を実施

2016年9月に静岡県・天竜厚生会様のご協力のもと、カンボジア教育省および州教育局の職員などを日本に招いて幼児教育研修を行い、「遊びを通じた学び」の様子などを見学していただきました。



② コミュニティラーニングセンター事業で、農業コンサルタントを投入

識字後教育の一環として実施している農業研修をより効果的に行うため、2016年半ばから農業コンサルタントと契約し、指導してもらっています。ある農家では、収穫量が1.5倍に、収益が2倍になりました。



③ 農村での校舎建設活動の推進

農村地域では、住民が手作りで建てた、壁のないタン屋根だけの校舎も多い状態です。辺鄙な地域に暮らす子どもたちにも、安全で快適な校舎で勉強してもらえるように、農村地域でも校舎建設を進めています。

④ 「国民読書の日」制定

シャンティでは他団体と協力して、カンボジア政府に対し図書館活動や読書推進に関する政策提言を行ってきました。その成果の一つとして、2016年に国民の読書習慣の推進や読み書き能力の向上を目指し、「国民読書の日」が制定されました。



From Cambodia

カンボジア事務所

農村などの僻地での支援活動を行うカンボジア事務所の様子をお届けします。



カンボジア事務所長
玉利 清隆 たまり きよたか

PROFILE

20代は民間企業に勤務。その後青年海外協力隊、他NGO、JICAの業務で、アフガニスタン、スリランカ、南スーダン等に駐在。2014年3月シャンティに入職、同年9月より現職。

術や考えを理解してもらい、実践できるようにしてもらって必要があるため、時間がかかります。当然ですが彼らには彼らの文化や生活があり、中には新しいやり方に抵抗を示す人もいます。活動の成果を挙げるには彼らに主体的に行動を起こしてもらうことが重要で、良好なコミュニケーションを図りながら適切な技術移転を行い、事業の持続性確保に努めたいと考えています。

関係者、地域の人々の主体性を促進

1991年に設立されたカンボジア事務所はシャンティの中でも一番歴史が長く、長年勤務している職員が多くいます。地道に活動を続けている団体であること、また自身にカンボジア駐在経験があり馴染みがあったことから、私はカンボジア事務所の活動に携わることになりました。これまで学校建設、図書館活動、職業訓練、幼児教育など様々な事業を行ってきましたが、近年は経済発展や現地NGOの台頭もあり、行政職員のスキル向上や拡大した経済格差を是正する活動にも力を入れています。

社会状況に合わせ変化する活動内容

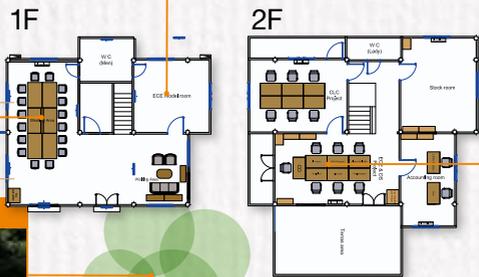
AIRMAIL

1F ミーティングスペース



朝礼をしたり、ミーティングや作業をする共有スペースです。

バタンバン
事務所の中を
のぞき見！



事務所にはスタッフたちのデスク(担当事業ごとに3部屋)や書類棚があります。

庭



沢山の植物が植えられています。緑に囲まれた事務所です。

1F 幼児教育モデルルーム



幼児教育事業で推進している、名前を書いたお道具箱や飾り付け、本棚などが置いてあります。

2F オフィス



デスクで、ベースライン調査のデータをパソコンでまとめているところ。調査後は毎回、この作業が必要になります。



バタンバンのシンボルである“ダンボン・クロニユン像”から徒歩5分程の所に事務所があります。周囲に建物が少なく、交通量は多すぎず、通勤しやすい立地です。少し先にサンカー川が流れ、川沿いには、広場や出店があり、夕方や週末は多くの人でにぎわっています。

From Cambodia / カンボジア事務所

現地スタッフの1日

教育現場歴30年のフーンさんの地方教育に尽力する活動の様子をご紹介します！

学校建設、幼児教育事業
担当スタッフ

シブ・フーンさんの1日に密着

PROFILE
教員として8年、教育局(日本でいう教育委員会)で12年間勤務後、シャンティに入職して10年目。



シャワーを浴び、朝の運動、英語の勉強、カンボジアの伝統的な音楽を演奏するなど、朝の時間を楽しみ、仕事に行く準備をします。

4:45 起床



6:30 朝食



同僚と朝食を取りながら、仕事の優先順位を考えます。

7:25 出勤



オートバイで出勤後、事務所の庭の手入れをします。

業務開始



7:30

朝礼に出て、1日の予定や報告などを情報共有後、研修会へ。研修会の講師を務めます。

11:30 昼食

同僚といっしょの食堂でお昼を食べます。調理を手伝うこともあります。(写真はマンゴーを切っているところ)

13:30



支援する学校に出向き、合意書を取り交わしました。学校側の積極的な協力を約束してもらいます。



zzzz

21:45 就寝

明日の準備をして、戸締まりを確認してから就寝します。



20:00 自由時間

TVを見たり、本、新聞、雑誌を読んで過ごします。英語の勉強もします。プノンペンにいる息子に電話して、宿題や家族のことなどを話します。

17:30 夕食

市場に夕飯の食材(野菜、肉、魚など)を買いに行きます。今夜のメニューは、豚肉と魚、野菜炒め。

Hot Topics

①教材活用研修会を実施

教材の活用法に関する研修を行い、小学校に教材を供与しました。研修会を通じて教員たちは、単語や数字、絵が書かれたフラッシュカードを使った授業の仕方、絵本や読書教材を教科書の補助教材として活用する方法、100玉そろばんを自作して算数に役立てる方法などを考えました。研修会后、学んだことを授業に活かしているか確認するため学校を訪問したところ、多くの教員が教材を活用している様子を見ることができました。



「ガンビーさんのふなあそび」ほるぷ出版

②子どもたちに絵本を届けるため

ヴィエンカム郡の学校を訪問した際、先生やシャンティのスタッフが絵本の読み聞かせをしている姿を見て、一人の女の子が「私もやって見せたい」と自ら本を持ってきました。み

んなの前に立った女の子は見よう見まねで読み聞かせをしてくれました。学校がただ勉強するための場所ではなく、子どもの「やってみたい」という意欲を引き出す場になってきています。



ラオス事務所長
加瀬 貴 かせ たかし

PROFILE

2004年国際協力業界に就職。2008～2010年日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所現地駐在員、2011～2013年青年海外協力隊カンボジア派遣を経て、2013年5月より現職。

生かしてインドシナ半島のどこかで活動したいという気持ちから、ラオス事務所の活動に参画しました。現地で活動するにあたり、ラオス人スタッフと過ごす時間が非常に楽しいですし、感謝することが多いです。もちろん、信頼関係の構築、意見のすり合わせ、事業地の道の悪さなど、困難なことも多数あります。しかし、彼らと頭を悩ませながらも、ラオスの教育の現在や今後を真剣に議論できることは大変貴重な経験です。

ラオス

From
Laos

ラオス事務所

ラオスの農村や僻地^{へきち}における教育開発に
取り組むラオス事務所の活動をご紹介します！



農村僻地の
教育格差の改善が課題

2014年よりルアンパバーン県ヴィエンカム郡にて2つの事業を開始しました。1つ目は学校建設を中心とした施設改善事業、2つ目は教員の指導能力改善事業です。

施設改善事業では、学校関係者を含め地域の人々を巻き込み、小学校校舎の建設、トイレ・給水設備の設置を行います。指導能力改善事業では、教員養成研修会の実施、指導教材・読書教材の開発と配布、教育行政官のモニタリング能力向上などを実施します。近年ラオスでは都市と農村部間、民族間の教育格差が課題になっており、僻地における教育環境の改善を目指し活動しています。

未来について仲間たちと
真剣に議論できる喜び

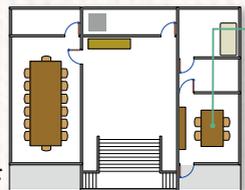
教育支援活動に以前から興味があり、またカンボジアでの経験を

AIRMAIL

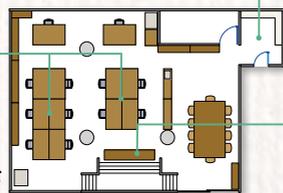
ルアンパバーン 事務所の中を のぞき見！



大会議室：過去に日本から届けられた絵本が参考図書として本棚に保管されています。



2F



1F



各自デスク：事業スタッフ、経理総務、所長、プロジェクトマネージャーなど、担当ごとに別れて座っています。



キッチン：スタッフが簡単な調理をするスペースです。



階段下の本棚：日本から届いた絵本を一時的に保管しています。



ラオスの事務所って
こんなところ

Laos
ラオス



ルアンパバーン県教員養成校 (TTC:Teacher Training College) 徒歩1分くらいの所にあり、複式学級運営能力強化で多大な協力を得ています。



惣菜屋台 昼になると、惣菜屋台が数軒現れます。シャンティ職員も時々のお惣菜を買って事務所で食べています。

From Laos / ラオス事務所

現地スタッフの1日

移動図書館活動を通じて本を読む機会を届けている現地スタッフの日頃の様子をお届け！

移動図書館活動担当 ブンリエン・ ジョアルーワンさんの 1日に密着

PROFILE
モン族の現地スタッフ。2014年入職。ヴィエンカム郡の出張所に勤務。甥っ子と二人暮らし。



6:00 起床

起床後、顔と歯を洗い、着替える。

7:30 朝食

7時から朝食を作り食べます。(うるち米、辛味ペースト、野菜、卵焼き)

8:00 出勤

当日使う絵本、書類、道具、道路状況などを確認して出発します。

業務開始

9:30
A小学校での
移動図書館活動

教員との短い打ち合せの後、自由読書や読み聞かせ、本の貸出などを行っています。

13:30
B小学校での
移動図書館活動

午後の小学校へ移動。教員との振り返り会議を行い問題・悩みについても助言します。

12:00 昼食

学校へ行く前に市場で野菜や惣菜を買って行き、教員家で調理します。

20:00 夕食



17時半に帰宅後、音楽を聞いたり、運動、水浴びをして、19時に甥と夕食を作り、20時に食べます。(野菜、豚または鶏、卵、うるち米)

16:30 事務所へ戻る

翌日の活動に備えて絵本を用意したり、訪問する学校に確認連絡を入れます。

20:30 自由時間



お話を覚えるために絵本を読んだり、読み聞かせの練習を少ししたり、学校で得た情報を記録してまとめます。テレビを見たり、友人隣とおしゃべりする。

22:30 就寝

教育の必要性を農村部にも浸透させていきたい！

ヴィエンカム郡の出張所から移動図書館車で本を届けています。ヴィエンカム郡教育事務所からシャンティを紹介され入職して3年。自分の読み聞かせで子どもたちがお話を楽しんでる時は、仕事に自信が持てて嬉しく思います。

ラオスは他民族国家ですが、多くの人が農業や家畜の飼育で生計を立てています。農村部のモン族はシャイな人が多く、また、農業をして生活するだけの人生になぜ教育が大事なのかと疑問を抱く人がまだまだ沢山います。そのため、時折、教員に主張や指導が伝わらないことがあり、難しさを感じますが、学校を再訪した時に改善が見られることもあり、やりがいを感じます。



ボランティア 人たち

Vol.
76



花王株式会社の社会貢献活動 花王ハートポケット倶楽部

花王株式会社
コーポレートコミュニケーション部門
社会貢献部 菊池さわ子

花王グループは、「消費者・顧客の立場にたつて、心をこめた「よきモノづくり」を行い、世界の人々によるこびと満足のある豊かな生活文化を実現するとともに、社会のサステナビリティ(持続可能性)に貢献すること」を使命としています。この使命のもと、社会貢献活動においても、より良い社会づくりに寄与すべく「次世代に向けた環境づくりと人づくり」をテーマに活動を行なっています。

2004年には、花王グループ社員の「社会に役立つことを何かしたい」という気持ちを形にする、社員参加型社会貢献プログラム「花王ハートポケット倶楽部」の活動が始まりました。

倶楽部では、趣旨に賛同する社員の毎月の給与から、1口50円から100口の範囲で任意の金額を拠出して積み立て、より良い暮らしや社会の実現に向けて、社会的な活動に役立てています。倶楽部のネーミングは社員の公募で決まり、基金の使途も15人の会員代表で構成される運営委員会が決定されるなど、社員が関わりながら活動しています。

積み立てた基金は、災害時緊急支援、社員が参加しているNPO・NGOへの寄付、地域の市民活動を応援する地域助成、少し大きな規模の活動を応援する大型助成の他、社員のボランティア活動への参加活動費としても活用されています。

その中で、社員が参加する活動のひとつに「絵本を届ける運動」があります。倶楽部がこの運動に参加したのは2005年。以降11年間にわたり、

1860人のグループ社員が参加し、2040冊の絵本が活動地に届きました。全国にいる参加社員は、夏休みに自宅に持ち帰り、家族や友人と、また、職場で同僚と取り組むなど、様々な形で楽しみながら協力してくれています。参加後には、参加した感想とともに作業中の写真も提供してくれる社員も多くなるそうです。

「久しぶりに絵本に触れることができました。事前に贈る国のことを調べ、どんな子どもたちが手に取ってくれるのか想像しながら楽しく作業しました。誰かの役に立てると思うとやさしい気持ちになれるので、参加できることがうれしいです」という参加社員の感想が多い中で、最近では、ある社員から、「高齢の母と一緒に参加しました。体力がない高齢者でも人の役に立てると嬉しそうに作業してくれました」という感想をもらった

そうです。「高齢者の方の誰かの役に立ちたいという気持ちに役立てたようで、とても嬉しかったです」と話すのは、社会貢献部の菊池さん。「私たちは、様々なボランティア活動を紹介することで、何かしたいけど一歩を踏み出せない方に、社会の課題を知るきっかけを増やしたいと思っています。また、誰かのためにお役に立てた時、人はとても幸せな温かい気持ちになれると思います。この活動を通して、社員やその家族の皆さんとともに、アジアの子どもたちの未来づくりに少しでもお役に立てたらと思っています」と語ります。

「次世代を育む環境づくりと人づくり」をテーマに社会貢献活動を推進されている姿勢が、世界に広がる花王ブランドをつくりあげているのかもしれない。

(聞き手：広報課課長 鈴木晶子)



職場でボランティアに参加した社員のみなさん



事業場地域の市民活動を応援する地域助成を実施

シャンティからのお知らせ

専務理事交代のご挨拶

3月25日の社員総会にて理事の選任案が認められ、次期シャンティ国際ボランティア会(SVA)の業務執行部体制が決まりました。その中で専務理事は、茅野俊幸に代わり、岡本和幸(千葉県 真光寺住職)が就任しました。交代にあたり、前任の専務理事、茅野よりご挨拶をさせていただきます。



これからも共に

前専務理事 長野県・瑞松寺住職 茅野俊幸

14年間SVA内での役職に関われたこと、あらためて深く感謝いたします。私はSVA創設者の故・有馬実成老師から「SVAの組織内に若い僧侶が必要だ」と言われたご縁と、亡き母が子ども文庫活動を通して「地域の触媒」となっている姿を近くで目にしてきたことから、SVAの活動に踏み込むことができたのだと思います。専務は退任いたしますが、今後は理事として「地域の触媒」となれるよう協力してまいります。ご縁に終わりはなく、これからも共にシャンティ(平和)を目指して!

松永然道名誉会長 偲ぶ会を開催

2017年2月にご遷化された松永名誉会長を偲ぶ会を、5月15日(月)東京グランドホテルにて執り行いました。生前よりご交友のあった関係者をはじめ、松永老師を慕う皆さまにお集まりいただき、タイからはプラティープ・ウンソントム先生も駆けつけられ、哀悼のお言葉を賜りました。曹洞宗東南アジア難民救済会議(JSRC)の頃より、故・有馬老師と共に二人三脚で会の運営に尽力され、多くの人に慕われたお人柄を感じさせる会となりました。厚くお礼申し上げます。

人事のお知らせ

●入職

澤井 美奈江 カンボジア事務所 事業コーディネーター(契約職員)
(6月1日付)

●退職

山田 哲也 ミャンマー事務所 事業コーディネーター(契約職員)
(5月19日付)

江口 秀樹 カンボジア事務所 事業コーディネーター(契約職員)
(5月20日付)

阪口 佳代 ミャンマー事務所 事業コーディネーター(契約職員)
(5月31日付)

●異動

三宅 隆史 ネパール事務所 所長(正職員)(4月1日付)

編集後記

私事ですが、2017年4月末、我が家に子どもが産まれました。予定日を過ぎてなかなか陣痛がはじまらず、入院してお産を促そうと予定していた日の未明、自然陣痛がはじまりました。おかげで、入院からお産まで妻に付き添い、我が子が産まれる瞬間に立ち会うことができました。すべての子どもたちが自分の可能性や夢に向かって歩んで行けるよう、父として、夫として、そしてシャンティの一員として、これまで以上に励んでまいりたいと思います。(召田 安宏)

シャンティ 2017年夏号(通巻291号) | 2017年7月1日発行

発行人: 若林恭英

発行所: 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大塚町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: www.sva.or.jp E-Mail: info@sva.or.jp

編集人: 関尚士

編集・制作: 株式会社文化工房

イラスト: きよはらえみこ

印刷: 株式会社 サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。

シャンティ国際ボランティア会が、アジアや日本で活動した歴史を振り返ります。

SHANTI HISTORY

SINCE 1981

1999

— 絵本を届ける運動のスタート —

シャンティの活動の原点である、1999年に始動した「絵本を届ける運動」は、厳しい情勢のなかで教育を受けることができないカンボジア、ラオスの子どもたちに明るい光を照らしました。活動を開始した当時の様子をお届けします。

家庭でも取り組める国際協力として始まった「絵本を届ける運動」。1999年には約750人の手により訳文が貼り付けられ、カンボジアに1,941冊、ラオスには1,532冊の絵本が届けられた。

現地事務所から各地域の図書館、小学校に絵本が届けられると、子どもたちは奪い合うように絵本を手に取り、まだ見たこともない外国の風景を頭に描いた。ページをめくる本の右下あたりはポロポロになり、ちぎれるまで何

度も読まれていた。「少ない予算で数十万の難民に食料を配れば1日も持たない。もし、絵本や図書なら同じ予算でも長い間、心の糧になる」。この考えは間違っていないかった。

ラオス事務所のスタッフが発地先生の話を聞くと、子どもたちは後ろで楽しそうにずっと本を読んでいた。先生が本を読み聞かせすると、まるでコンサートのようになり子どもたちが集まり、笑い声が渦巻く。さらにスタッフは、興味津々に話を聞く子どもたちの姿を見て集まってきた大人たちの姿を目にする。この読み聞かせ活動は、子どもたちのためだけのものではなかったのだ。自分たちの生活に先が見えず、消沈した雰囲気の中で、明るい笑い声に包まれる安らぎこそが、そこに暮らす彼ら全員が本当に欲しているものであったのだ。



日本から届けた絵本を読むカンボジアの子どもたち



参加者の先生による読み聞かせの実践

